

第91回三松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十七年六月二十五日(土)
場所 九段校舎本館中洲記念講堂

日本の話芸〇落語公演・レクチャー

三遊亭小遊三／落語一席

鈴々舎馬桜／レクチャー・落語と江戸の風俗

研究発表

《国文学》

芥川龍之介『蜜柑』論

博士前期課程二年 松川 宣弘

芥川龍之介『蜜柑』は大正八年五月、「新潮」に発表された作品である。先行論には、主人公を芥川と同一視し、作品中の「疲労と倦怠」を芥川の創作上の行き詰まりと読む吉田氏、菊池氏の論、ネガティブな「私」の姿勢は、鮮やかな蜜柑の色彩に「反転的效果」をもたらすための「トーン」であるとした高橋氏の論、芥川が読者に刷り込もうとしていた自己像が推察できるのではないかとした石割氏の論などがある。

本発表では、「私」は、なぜ「云ひやうのない疲労と倦怠」「不可解な、不平等な、退屈な人生」を「僅に忘れる事が出来た」のかという点を、「私」の語る内容の考察を通じて明らかにしていく。

近世文学における修羅の考察

博士後期課程一年 藤 巻 公 樹

修羅に対する先行研究は中世までのものや、近代の『春と修羅』に對してのものが多く、近世期は修羅研究の空白の期間にあるといえる。また、日本の修羅観は世阿弥の修羅観によって完結したとされている。そのため、近世における変化の有無について考察する。近世において修羅のイメージは不統一の状態にあり、表記の他、修羅そのもののイメージが多様化している。そのため、修羅は自由な演出で様々な作品に用いられており、武者的な武士固有のイメージも消えている。

これにより、近世では世阿弥の描いた修羅観にとどまらず、多様なイメージで用いられていることが確認できた。武士化した日本の修羅が、近世において死者の姿へと再び変化したのである。これは近世文学における修羅の特徴であると同時に、世阿弥の修羅観が日

本の修羅観の完成ではないことを意味する。

《中国学》

『上海繁昌記』について

博士後期課程三年 川 邊 雄 大

『上海繁昌記』三卷(清 葛元煦撰 日本 藤堂蘇亭訓点 明治十一年1878刊)とは『滬游雜記』四卷(清 葛元照撰 光緒二年1876序刊)を編輯し訓点を施したものである(以下『繁昌記』『雜記』)。

『雜記』巻一・二では上海の名所名物を述べ、巻三では上海の詩を収録し、巻四は上海における在外公館・企業・船賃等の一覽が詳細に列挙されている。「上海旅行ガイド」ともいうべき書物である。しかしながら『繁昌記』では巻三・四が編輯し直され大幅な削除がある。また明治十一年には別に、『雜記』の和刻本も刊行されているが、巻一・二の刊行にとどまっている。

『繁昌記』は編輯の結果、上海固有の風物よりも寧ろ租界地の風物に関する記述が中心となり、そこに日本人編輯者の関心を読み取ることが出来る。つまり「ガイド」と言うよりは寧ろ異国情緒の色濃い「読み物」となったのである。

本発表では『繁昌記』の「繁昌記物」の中における位置付け、また『雜記』『繁昌記』両書を比較してその相違について述べたい。

なお『繁昌記』中には在留邦人の記述もみられるので、当時の上

海と日本の関係も同時にみていきたい。

貝原益軒『大疑録』に於ける宋儒批判

博士後期課程三年 岡 野 康 幸

貝原益軒(一六三〇年〜一七一四年)最晩年の著作『大疑録』には益軒自身「篤信(益軒の名)十四五歳自り聖学に志有り。夙に宋儒の書を読みて其の説に敦くし、之れを宗師とすること尚し。復た嘗て大いに疑ふ所有り。……思ひを覃むること三十余年と雖も、然れども独り惑ひを抱き未だ啓明する能はず。以て終身の慊^{うらみ}と為す。此に於いて姑く疑惑する所を記し、以て識者の開示を望むのみ。……」(『大疑録序』)と記すように宋儒に対する大疑を提示したものである。

益軒の宋学に対する大疑を一言で表現すれば、分析しすぎるという点である。大疑という表現を借りて実質宋儒の批判を展開する。そこで益軒が挙げているものは「無極・大極」「理氣二物」「天地之性・氣質之性」といった宋学の主要概念である。そして益軒は分析的な見方ではなく、渾融的な見方・捉え方が本来の儒教であると『大疑録』にて示す。

本発表では貝原益軒が大疑という表現で明示した批判がどのような性質であるのか。また益軒と宋儒(特に朱熹)との相違点を明らかにする。